

## 実践報告

## 市立札幌清田高等学校

### (1) 研究内容

研究課題：「性に関する学習の研究」

『性と生』をテーマとする授業から基本的人権・民主主義・共生社会を考える

- 公民科「倫理」で人間の尊厳と生命への畏敬に対する思索と、民主社会における人間の在り方や生き方についての自覚を深めていく。
- 協働学習において互いの立場や意見を尊重し、幅広い視点で物事を考え、自分の言葉で表現する力を養う。
- 障がい者のあるなしに関わらず、他者を尊重する態度を涵養することで、共生社会の実現を目指す。

### (2) 実践内容

対象生徒：市立札幌清田高等学校1年生 合計：320名

講演：札幌医科大学助産学専攻科准教授 荒木 奈緒 氏

授業者：市立札幌清田高等学校公民科教諭 長沼 斎・藤倉 水緑

【導入】新型出生前診断に関する新聞記事や映像を通して課題を認識し、それに対する意見交換を行う。

#### ○ねらい

- ・ 新型出生前診断に対する、自分の意見と他者の意見を交流することで、幅広い視点で課題を考える。

#### ○学習内容

- ・ 毎日新聞「漫画で解説 出生前診断って？の巻」（平成24年10月22日付）を読んで、新型出生前診断に対する基本的な知識を確認する。
- ・ 生徒自身が将来当事者として、新型出生前診断を受けるか否か、そしてダウン症が判明したとき中絶するか否かについての考えをまとめる。
- ・ NHKスペシャル「出生前診断 その時夫婦は」（平成24年9月16日放送）を視聴し、新型出生前診断を受けた夫婦の葛藤を共感的に理解する。
- ・ 新型出生前診断を受ける受けない、中絶をするしないの理由について、4人1班のグループで討議し、その結果を発表して全体で確認する。

【展開】「ヒトの多様性と唯一性 新型出生前診断から見えてくること」をテーマに、  
新型出生前診断に直接医療現場で携わっている専門家の講演を聞く。

#### ○ねらい

- ・ 生物学的視点からダウン症もヒトの多様性のひとつであることを認識し、ダウン症に対する社会の在り方を考える。

#### 【荒木奈緒氏の講演要旨】

- ・ 遺伝子は体をつくる設計図であり、染色体は設計図を入れるファイルボックスである。
- ・ 遺伝子は2万7千種類あり、手と手を組み合わせたときに左右どちらの指が上になるか、巻き舌ができるかできないかなども、設計図の違いから生まれる。
- ・ ダウン症候群は21番目の染色体が3本あり、21番目のファイルボックスが1個分多いだけである。
- ・ 1000人生まれると、40人は何らかの先天性疾患がある。染色体疾患はそのうちの10人程度で、5人程度がダウン症候群である。
- ・ ダウン症はヒトの多様性の一つである。

#### ○学習内容

- ・ NHKスペシャル「出生前診断 その時夫婦は」で放映された「胎児がダウン症だったら困る」という妊婦の発言に関し、「妊婦は何に困っているのでしょうか。」という講師の問いへの回答を考える。
- ・ 体をつくる設計図である遺伝子は各々異なり、その多様な私たちの中で私という存在は唯一であることを理解する。
- ・ 「ダウン症の人も私たちと設計図が違うだけであり、設計図が違うだけで生まれてきては困るのでしょうか。」「手と手を組んだときに左の指が上になると、生まれてきては困るのでしょうか。巻き舌ができないと、生まれてきては困るのでしょうか。」という講師の問いへの回答を考える。

【まとめ】 これまでの学習の振り返りを行う。

#### ○ねらい

- ・ 新型出生前診断によってダウン症に対する差別が助長されかねない現状を認識し、共生社会の在り方を考える。

#### ○学習内容

- ・ 朝日新聞社AERA「新型出生前診断の増加は障がい児排除につながらないのか」（平成28年10月31日号）を読み、ダウン症に対する社会の現状と優性思想の危険性について理解する。
- ・ 授業の感想を書き、自分自身の考えを再構築する。

### (3) 研究のまとめ

#### ①成果

- 当初の話合いでは新型出生前診断に対して、「障がいのある子どもを産みたくないから受診する。」「子どもに障がいがあることを事前に知れば子育ての準備ができるから受診する。」といった肯定的な意見と、「障がいのある子どもの命を奪うことにつながるから受診しない。」といった否定的意見に分かれた。授業の過程で、①ダウン症と判定された胎児の8割以上が中絶されている事実、②新型出生前診断を受診したことによって起きる実際の家族の葛藤の様子、③全てのヒトが遺伝的に唯一の存在であり、ダウン症もヒトの多様性の一つであるという生物学的な見方、④新型出生前診断によって優性思想や障がい者差別が広がる危険性の4点について学習したことによって、それまでの自分自身の意見が揺さぶられ、多面的・多角的に考えることができた。
- 新型出生前診断を巡る問題は、人間の尊厳や生命への畏敬とは何か、そして障がいをもつ人に対する社会はどうあるべきかを問う人権問題であることに気付き、生徒それぞれが人間としての在り方や生き方、社会の在り方について考えることができた。

#### 【生徒の意見・感想】

- 親は子どもを産むか産まないかということよりも、子どもを責任をもって育てられるかということで悩むのだなと思いました。私は障がいや病気で中絶するのはあり得ないと思っていましたが、生まれてくる子を幸せにできるのかを考えて止むを得ず中絶してしまう親の気持ちも分かったような気がしました。でも中絶してもその子の存在はなかったことにはならないので、その後笑顔で過ごすこともできないと思いました。私は将来どうするのか、深く考えさせられました。
- 私は元気に生まれてくることは当たり前ではなく、奇跡のようなすごいことだと思った。両親が苦労して産んでくれたこの命を無駄にしないよう大切にしていきたい。自分が産む立場になったら、産まれて来る赤ちゃんがどんな子であろうとそれをしっかり受け止めて大切に育てていこうと思った。障がいをもった子を授かったことをマイナスに捉えるのではなく、プラスに捉えていけばいいなと思う。
- ダウン症の子どもを妊娠したら悩むのは、世間の人々がダウン症など障がいのある人々への思いやり、尊重、理解が足りないからだと思います。五体満足で障がい無くとも完璧な人などいないのに、どうして障がいがあるだけで偏見をもつのでしょうか。障がいの有無に関係なく、差別がなく同じ人間として受け入れられる社会になったらいいと思います。産みたくても産むことができない人がいる中で、社会の支援が充実していれば、もっと生きやすい世の中になって中絶する人も少なくなっていくのではないかと思います。障がいがあっても生まれてくるのは誰のせいでもなく、そのこの運命と受け止めて、みんなで育てていくべきだと思います。

- 外部講師から、担当教員ではカバーしきれない専門性の高い知識や新たな視点を生徒に提供していただいた。講演後グローバルコースのみであったが、講師による振り返りの授業が行われた際、生徒の質疑に対し医療現場の実態に裏付けされた応答がなされ、生徒のより深い学びにつながった。
- “Think globally, act locally.”をモットーに社会に貢献する「地球市民」の育成を目的とした本校グローバルコースは、開設以来人権教育に取り組んできた。昨年度の人権教育推進事業で行った「LGBTの人権」や今年度の「新型出生前診断」の実践もグローバルコース1年の「国際的人権」や「現代社会」の授業として実践してきたものである。今年度グローバルコースの成果を普通コースに還元するため、初めて教科担当2名で公民科「倫理」の生命倫理の単元を活用し、1学年全体の授業に発展させた。新型出生前診断の授業実践が、他の教員にも広がったことによって、次年度以降も安定的に実践できる形が出来上がった。

## ②課題

- 今回の実践では、子どもをもつかもたないかは女性自ら決定できるとする、リプロダクティブライツの視点が弱かった。例えば法律の専門家による法学的な視点からの講演でそれを補うなどといった、女性の人権への配慮も必要である。
- 『33才で私を産んだ母に出生前診断について聞いたら、「もちろん受けたよ」とあっさり言われた。「ダウン症だったらどうしたの」と聞いたら「おろしたよ」と言われ驚いた。優しい母がそんなことを言うとは思わなかった。幸か不幸か私はダウン症ではないので、こうして生きているが、その日はあまり眠れなかった。そのような判断をしなければならぬのなら、子どもはいらぬと考えてしまう。』という生徒の感想文があった。授業がきっかけで保護者と生徒の出生前診断に対する意見対立が生じた場合の心理的ケアに関し、養護教諭やスクールカウンセラーに助言を求めることも必要である。

## ③提言「人権教育のすすめ」

- 先進的な取組は、一部の担当教科や担当教員だけで実践が完結してしまう傾向にある。その成果が全体に還元されるためには、より多くの教員が関わる体制づくりが不可欠である。今回の実践は、「倫理」以外に「家庭」「保健」「生物」との連携が考えられる。また教員だけで授業を実践するのではなく、外部の専門家の協力を仰ぐことによって、教員にも生徒にもリアリティのあるより深い学びが期待できる。